

NEWS LETTER

Vol. 21

2024.2.

研究者のAIとの付き合い方

管路防災研究所 シニアフェロー 小池 武

1. 研究者の資質

検索システムの無い時代の研究者は、既往の研究を調査できる範囲が今とは比較にならないくらい限定的であったが、何処かの時点で自身のアイデアの新規性・独自性を見極める決断をし、その後はそのアイデアの実現に向けて粘り強く邁進したはずである。

ここで重要なのは、自から独自アイデアを見つける洞察力である。そして、そのアイデアの意義・価値・倫理的妥当性などの判断は研究者自身が考えるべきであろう。

問題点や課題は、日々注意深く事象を観察することから見つかる。しかし、問題解決のための画期的なアイデアを思い着くのは、問題意識やアイデアを抱えて悩む頭脳が何らかのきっかけを掴む瞬間である。それが何かは、一般論では言えないが、どこかの瞬間に閃きとして現れる。



〒619-0237
京都府相楽郡精華町光台2-2-5
日本ニューロン株式会社
けいはんなサウスラボ
『管路防災研究所』

お問い合わせ先
info@neuron.ne.jp



2. AIの強みと弱み

研究論文を書く時、AIが既往研究事例の調査をしてくれるとこれほど有難いことはない。しかし、AIはデータが無いものは検索できないし予測もできない。AIにあるアイデアの既存非存在の証明を要請しても、与えられたデータベース内では未発見であったとの報告を得ることになる。しかし、研究者のアイデアと既存データとの距離を希少性や偏向性と言った尺度でAIに計測させれば、そのアイデアのユニークさを定量的に把握することができるかもしれない。したがって、研究者は、AIから正しい回答を得たいならば、研究目的の全体像を踏まえて、そこに到達するための最適質問条件を与えられるかにかかっていることを自覚すべきであろう。

3. これからの研究開発スタイル

AIは検索（質問）条件に応じて種々のデータを収集・分類することはできる。研究者は、AIから回答を得た時、それが正しいか、間違いか、問題有かを直観的に判断できなければならない。

以前にFEM解析結果の妥当性を判断するのは、研究者に十分な知識と洞察力が必要であると指摘したことがある。AIの場合も全く同様であり、AIの回答の良否を判断できるのは、研究者自身の問題に対する洞察力しかあり得ない。

これからは、研究者の洞察力がAIの技術進歩に追従できるかどうか、問われることになる。

